ＪＲ貨物のエフ・プラザ東京新Ｃ棟がダイワコーポ「品川営業所」に

鉄道輸送を含む陸・海・空の輸送モードに対応した高付加価値センター

日本貨物鉄道（ＪＲ貨物、本社・東京都渋谷区、田村修二社長）が東京貨物ターミナルに建設していたエフ・プラザ東京新Ｃ棟がダイワコーポレーション（本社・東京都品川区、曽根和光社長）の「品川営業所」（東京都品川区）として竣工し、８日に開所式が開かれた。延床面積１万８５６９平方㍍の地上６階建て（倉庫部分は１階と３～６階）のボックス型倉庫で、１階部分は両面バース（計18両分）を採用し、海上コンテナ用に計13基のドックレベラーを設置。東京港大井ふ頭の背後地で、羽田空港や京浜トラックターミナルという日本有数の物流拠点から至近の立地メリットを生かし、鉄道輸送を含む陸・海・空の輸送モードに対応した高付加価値物流センターとして運営していく。

ＪＲ貨物が大手タクシー会社向けに建設した施設を取り壊し、跡地に新たに建てた物流施設をダイワコーポレーションが借り受けた。ＪＲ貨物では同施設の賃貸借契約において「テナントが新たに鉄道コンテナ輸送を利用した場合、その個数に応じて翌年度の賃料を設定する」という新たなスキームを導入し、関連事業と鉄道事業との相乗効果を図ることとされた。

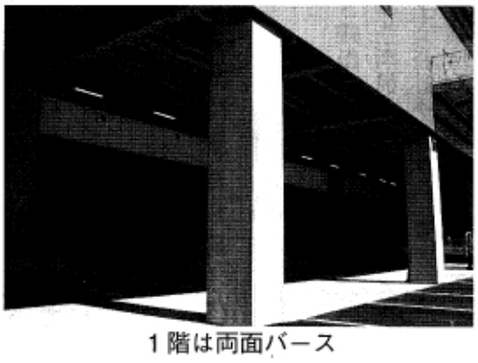
ダイワコーポレーションでは宅配などの輸送コストが上昇傾向にある中、「品川営業所」の開設を機に、鉄道輸送の利用を本格的に検討していく考えで、「ＪＲ貨物のレクチャーをいただき、鉄道輸送も含めた広い営業提案をしていきたい」（曽根社長）としている。既に約半分の利用が決まっているが、同営業所の取り扱い貨物としては、24時間３６５日対応が可能な立地であることから、「緊急性やセキュリティが求められる精密機械、精密機器など付加価値の高いものを扱っていきたい。流通加工も含めてこの場所で物流の〝起承転結〟ができるような体制を目指す」と強調。さらに東京港の混雑に言及し「大井ふ頭のコンテナヤードから近く、近い将来、（この倉庫を利用することで鉄道輸送も絡めた混雑回避等の）利点が増えてくるだろう」とした。

直会でＪＲ貨物の早瀬藤二常務取締役事業開発本部長は、「東京貨物ターミナルではいま３つのホットな話題がある。ひとつは、南側の約10万平方㍍の土地に17万平方㍍級の大型物流施設を建設するプロジェクトが始まった。また、同ターミナルは大井ふ頭と隣接しているが、国土交通省や東京都港湾局と、港と鉄道を結ぶ結節点として機能できないか勉強している。先は長い話だが港と（鉄道を）結びつけることで効率化され、周辺道路の交通渋滞緩和も期待できる。さらに、ＪＲ東日本が主体となり羽田空港アクセス線が検討されているが、３つのルートが東京貨物ターミナルで合流し、（建設する）地下トンネルを通って羽田空港にアクセスする――というものだ。こうしてプロジェクトと勉強会が並行して進んでおり、より物流拠点としての価値が上がる」と説明した。

また、新Ｃ棟建設に携わる中で、「（ダイワコーポレーションをはじめ）立派な活力のある会社とお付き合いができたことは大きな財産であり、つながりを強くしていきたい」と述べた。

ダイワコーポレーションの曽根社長は「当社にとってこのセンターを長期に賃借できるのは光栄なこと。当社のような中堅・中小企業がこの場所で仕事できるのは相当に喜ばしいことであり、（曽根功）会長が社長の時代から『いつかはこのエリアに倉庫を持ちたい』と思っていた」と挨拶。さらに「一昨年亡くなった宮城（浩）営業部長は当社の魂を感じる人だったが、このセンターのことを気にかけており、当社にとっては思い入れのあるセンター。開所から早々、共同運営していくことが決まっている企業からも今日は多数いらしている。ＪＲ貨物様の大事な資産を大事に丁寧に使っていきたい」と語った。

エフ・プラザ東京新Ｃ棟



１階は両面バース

庫内はＬＥＤを採用

ＪＲ貨物の早瀬常務

ダイワコーポレーションの曽根社長